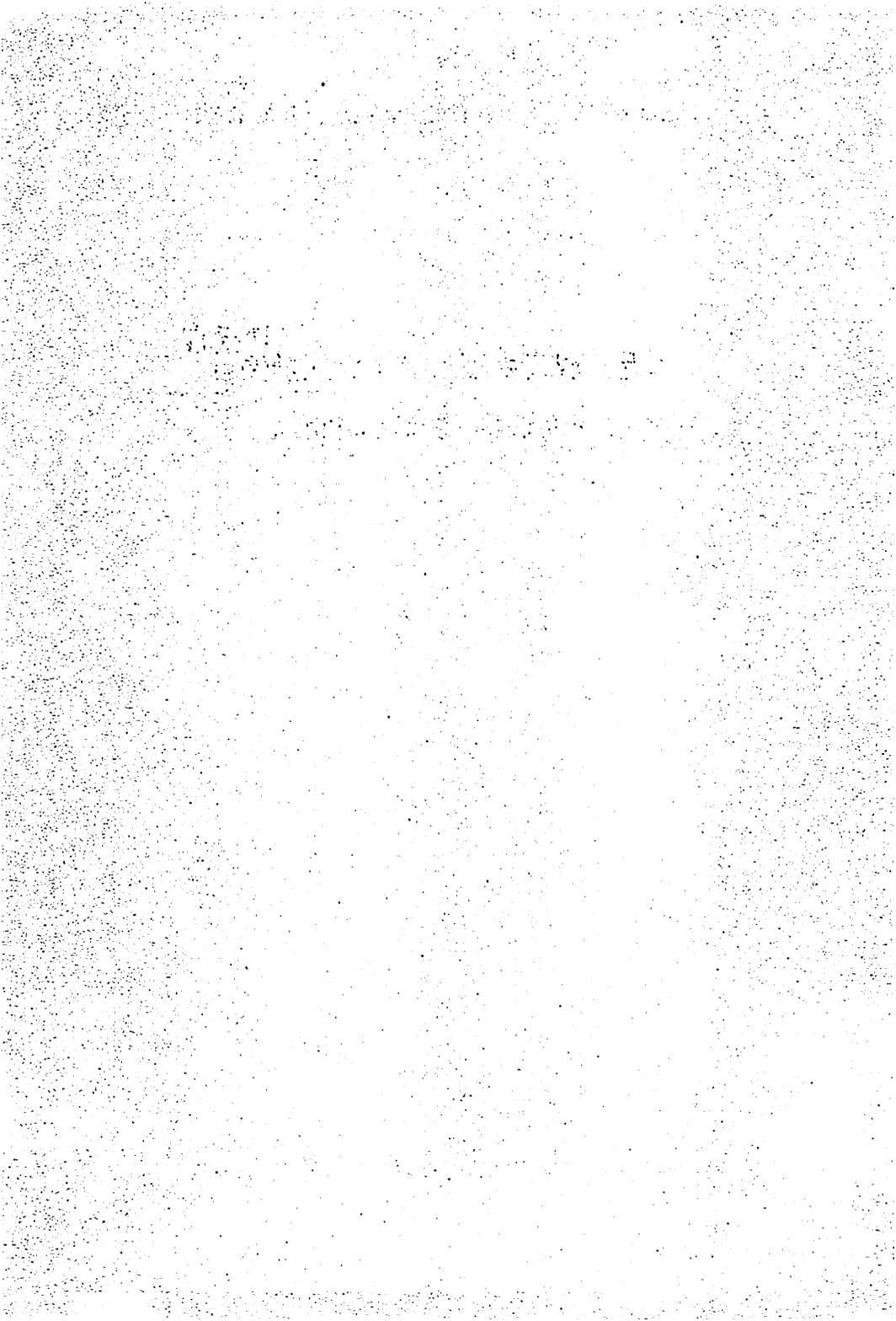


東北薬科大学 一般教育関係論集11号 別刷 (1997)

## 近・現代中国とドイツ文学受容

—アヘン戦争から中華人民共和国成立まで—

山 下 剛



## 近・現代中国とドイツ文学受容

—アヘン戦争から中華人民共和国成立まで—

山下 剛

中国の近代史は1840年のアヘン戦争に始まり、現代史は1919年の五四運動に始まるとされる。中国の近・現代史は、西欧列強の近代的武器・軍隊の前に無惨な敗北を喫し半植民地状態に置かれた中国が、欧米や日本に学び、そしてそれらと戦いながら急激に近・現代の意識に目覚めていく歴史でもある。そして、中国の近・現代文学の成立と発展は海外、特に欧米の近代思想・文学の積極的な受容抜きには考えられない。その中には中国人留学生によって日本経由でもたらされたものも少なくない。つまり、中国の近・現代文学を考えることは、必然的に日本との関わりも視野に入れることを意味する。中国における外国文学の影響は理論から創作への多岐にわたり、影響を受けた作家、詩人、研究者も膨大な数に上る。本稿では、アヘン戦争から1949年の中華人民共和国成立にいたる近・現代中国と外国文学の関係を、主にドイツ文学受容を中心に概観する。

### 1. 清朝末期から中華民国成立へ

アヘン戦争敗北後、西欧列強による半植民地状態に置かれていた清王朝は、太平天国（1851～64）を外国軍隊の力を借りてからくも平定したため、王朝維持のためになおさら西欧近代の科学技術・機械文明を学ぶ必要性を痛感するにいたる。ここに曾国藩（1811～72）、左宗棠（1812～85）、李鴻章（1823～1901）らによる「洋務運動」（1860～94）が起こる。そして、各地に造船所、武器製造所、陸海軍学校等が設けられた他に、西欧近代の

学問や科学技術を教える新式学堂（因みに、魯迅（1881～1936）が学んだ江南水師学堂、鉱務铁路学堂、郭沫若（1892～1978）が学んだ武備学堂もこのときに設立されたものである）、西洋書籍翻訳局、外国語学習の学堂等が設けられた。また、軍工技術や言語を学ばせるため、1872年にはアメリカへ120名の留学生が派遣され、引き続き75年、76年にはイギリス、ドイツ、フランスへの留学生派遣が始まる。

この「洋務運動」は「中体西用論」という思想に基づいている。それは中国の伝統的な学術を基本とし、必要な学術だけを西欧に学ぶというもので、自国の弱体ぶりを理解しない大國意識、いわゆる中華思想の産物であって、近代化にともなう思想の急激な変化を阻止しようとする保守的な傾向を強く持つものだったが、清仏戦争（1884～85）、日清戦争（1894～95）における敗北で、結果として失敗に終わる。

これに代わって登場するのが、康有為（1858～1927）、譚嗣同（1865～98）、梁啓超（1873～1929）らによる「変法自強運動」（1895～98）である。これは、ピョートル大帝によるロシア近代化の成功と日本の明治維新にならぬ、西欧の社会体制そのものを導入して立憲君主制に移行すべしという穏健な改良主義である。具体的には憲法制定・国会開設、科擧の廃止、新聞の発行、新式学堂や翻訳局の設立等、様々な改革案が上奏され、一旦は光緒帝（1871～1908）によって採用されるが、西太后（1835～1908）を中心とする保守派によるクーデタによって失敗し、何らの効果も上げることができず、わずか百日の天下に終わった（戊戌の政変（98））。その結果、譚嗣同は処刑されるが、康有為、梁啓超は日本へ亡命して啓蒙活動を続け、彼らが率いる改革派は孫文（1866～1925）らが率いる革命派と並ぶ一大勢力を成すにいたる。「変法自強運動」の遺産として注目すべきことの一つに、北京大学の前身である京師大学堂の設置（98）を挙げておかなければならない。北京大学は後に五四文化運動の一大中心となるのである。

さて、梁啓超が日本の政治小説の影響を受けて横浜で文芸誌「新小説」を創刊する（1902）と、清朝末期の中国に爆発的な小説ブームが起こる。それまでも歴史的に文学と政治が密接な関係にあった中国では、新小説も政治的・社会的効用と強く結び付いた形で出発したのである。

日清戦争の敗北後、深刻な危機感に襲われていた中国に、西欧思想や文学の本格的な翻訳が登場する。それは嚴復（1853～1921）と林紓（1852～1924）によるものである。

1877年から2年間イギリス留学を経験した嚴復は、トマス・ハックスレー「進化と倫理」（中国名「天演論」）（1897）、ハーバート・スペンサー「社会学」（「群学肄言」）（97）、アダム・スミス「国富論」（「原富」）（1901）、J. S. ミル「自由論」（「群己権界論」）（03）、モンテスキュー「法の精神」（「法意」）（04）等、全部で9編の社会科学関係の著作を翻訳し、思想界に深く大きな影響を与えた。原著は必ずしも最新流行のものではなく、訳も厳密ではない、大意をつかんだ古文による名文であった。しかし、特に、「天演論」の「優勝劣敗」、「生存競争」の理論は、改革・革命への理論的裏付けとなり、中国近代の思想形成に大きな役割を果たした。彼は民国成立後の北京大学初代学長に就任している。

一方の林紓は西欧や日本の小説を初めて翻訳した人物の一人として記憶される。彼自身は外国語ができなかったので、外国語ができる人物に口述させ、それをもとに美文調の古文に翻訳した。彼は約30年間に170余りの外国文学を翻訳し、それはデュマ・フィス「椿姫」（「巴黎茶花女遺事」）（1899）をはじめ、シェイクスピア、ディケンズから徳富蘆花にまで及んでいる。（因みに、ドイツ文学は含まれていない。）ただし、誤訳が多く、作品の選択にも問題があり、文体も美文ではあったが古めかしかったため、五四時期には厳しい非難の対象とされたが、当時は大いに読まれ、後世の文学に与えた影響も計り知れない。

さて、義和団の乱（1889）以後のわずか5、6年の間に日本への留学生の数が1万人余りに増加していった。それには何よりも洋務派官僚の張之洞（1837～1909）の手になる『勸学篇』（98）が清朝の指導精神となり、積極的に留学を推奨したことが大きかった。同文同種の国であるという気安さがあった上に、明治維新以後、日本が欧米の学問や技術を無差別に多様に取り込んでいたため、留学生たちはわざわざ遠く欧米まで行く必要がなかったのである。彼らは日本で欧米の近代思想に触れ、清朝にとっては皮肉なことに、そのほとんどが改革・革命思想にかぶれていった。彼らは欧米の新思想を日本書から手当たり次第に翻訳し、それもかなりの数に上ったが、それは計画的・体系的なものではなかったため、大きな力にすることができなかった。

しかし、ドイツ文学移入に関して大きな仕事をした最初の人物として魯迅の名前を忘れるわけにはいかない。魯迅はハックスレーやスペンサーから知った進化論や日本留学期に知った日本や欧米の文芸評論をもとに、文学による救国を訴える評論『摩羅詩力説』を発表する（1908）。魯迅は、「心声なる歌」を持たぬか、持ってもそれに耳を傾けない国は滅びるとして、独立と自由と人道のために戦ったバイロン、シェリー、プーシキン、レールモントフらを「摩羅詩派」と名づけ、彼らに脈々と流れる反抗的ロマン主義を高く称揚している。彼はニーチェの「超人思想」から強力な影響を受け、アルント、テオドル・ケルナーの名前を上げ、ナポレオン戦争下のドイツの愛国精神を高く評価している。また、魯迅は民族の自覚と自立のためには己を知り、広く世界を知ることが重要だと考え、積極的に外国文学の翻訳・紹介も行っている。ドイツ文学・文化関係では、「ハイネの詩」（14）、ニーチェ「ツァラトゥストラはかく語りき（緒言）」（18）、同「ツァラトゥストラはかく語りき（序文）」（20）、バーリン「メーリングの「文学史」について」（31）、「ドイツ作家版画展紹介」

(31)等がある。彼は木版画に新しい表現の可能性を見出し、ドイツの版画家ケーテ・コルヴィッツを精力的に紹介している。

ところで、20世紀始めには西欧への留学生も年を追って増加した。その大部分は私費留学生であったが、彼らは日本留学生ほど西欧の文学・思想の移入に熱心ではなかった。彼らについて梁啓超はこう述べている。

清末の西洋思想の運動についていえば、たいへん不幸なことがひとつある。西洋の留学生がほとんど全部この運動に参加しなかったことであり、運動の原動力およびその中堅が、西洋の言葉や文字に通じない人びとにあったことである。これが能力の限界となって、低俗、瑣碎、雑駁、浅薄、錯誤などのもろもろの弊害を、どれも逃れることができなかった。このために、運動は20年になんなんとしながら、けっきょく堅実な基礎をきずくことができず、おこったかと思えば、たちまち衰えて、社会に軽視されたのである。この点についていえば、昔の西洋留学生は、国家の期待を大いに裏切ったわけであった。(梁啓超『清代學術概論』(1921年)小野和子訳注、平凡社 1974年、p.309)

## 2. 中華民国初期から五四時期へ

康有為、梁啓超らの改良主義は、章炳麟(1868~1936)、孫文らの革命派に押されるようになり、1911年の辛亥革命を経て歴史の潮流は革命へと進んでいく。そして12年に中華民国が成立しやがて五四時期に入るが、西欧思想・文化への関心が政治・経済・哲学・文学・芸術に対する関心へと広まり、意識的に外国文化・文学を移入・吸収し始めるのは、この五四時期からである。

五四運動とは第一次大戦後の1919年、パリ講和会議で山東省の旧ドイツ権益が日本に譲渡されたことをきっかけに、5月4日に北京の大学生が反

日、反軍閥、反帝国主義の運動に立ち上がり、それが全国に波及していったものである。外国文学は19世紀末期から続々と移入され、五四時期以前はロシア文学、フランス文学等の古典が中心だったが、五四時期以降はさらに広範で大量になる。この時期に欧米の思想・文化が洪水のように押し寄せてきて、中国の伝統文化は大きく揺さぶられるとともに、中国の近代文学は急激に成長する。

辛亥革命後の思想的混迷を受けて、15年に陳独秀（1879～1942）によって上海で文芸雑誌『新青年』（1915～26）が創刊される。これは「デモクラシーとサイエンス」を旗印とし、欧米近代の思潮を広く紹介し、儒教を徹底的に批判する啓蒙雑誌であった。17年には北京に本拠を移し、執筆者も蔡元培（1867～1940）によって招聘された若い北京大学教授陣で占められるようになり、北京は新文化運動の総本山となる。中心人物の多くは日本や欧米での留学を経験しており、メンバーは陳独秀の他、李大釗（1889～1927）、胡適（1892～1962）、魯迅、周作人（1885～1967）、錢玄同（1887～1939）といった面々であった。17年に胡適と陳独秀の間で展開された白話（口語）運動をめぐる文学論争から、いわゆる「文学革命」の端緒が開かれ、翌年にはこの「文学革命」の実践として魯迅の『狂人日記』、イブセンの『人形の家』の翻訳等が掲載される。また、「文学革命」前には、『現代ヨーロッパ文芸史譚』が掲載され、古典主義から、ロマン主義、写実主義、自然主義へいたる西欧文学の発展過程が全面的に紹介されている。

『狂人日記』は中国の伝統的小説のように全知全能の語り手が三人称的に物語を語るのではなく、主人公である狂人自らが語り手となり、自分自身の内面の葛藤や妄想等を日記として書き留めていくという形を取る。この作品には欧米・ロシアの一人称口語体小説の手法、進化論やニーチェの「超人思想」の影響、現実主義ならびにロマン主義的要素、意識の流れや象徴主義的手法、そしてモダニズム的要素等が指摘される。これらにより

中国の封建主義的・儒教的弊害が客観的に把握され、批判されたのである。その意味で、この『狂人日記』は中国の近代小説の誕生を告げる記念碑的作品とされている。

魯迅以外の中国の作家たちも西欧文学を受容することにより、創作意識を高め、視野を広めていく。また、それまで知られていなかった、人間、内面、自由恋愛、市場経済等、近代西欧の重要概念が一斉に取り上げられるようになり、作品も多様性を獲得していく。

『新青年』が19年以降マルクス主義受容の問題で内部分裂し中共の機関誌化していくと、そこから別れた一派が21年に北京で「文学研究会」(1921～32)を旗揚げする。発起人12人の中には、周作人、鄭振鐸(1898～1958)、沈雁冰(後の茅盾、1896～1981)、葉紹鈞(1894～1988)、孫伏園(1894～1966)、許地山(落華生、1894～1941)らがおり、『小説月報』を機関誌として活動を始める。

これとほぼ同じ頃、21年には当時日本の大学に官費留学していた郭沫若、張資平(1893～1959)、郁達夫(1896～1945)、成仿吾(1897～1984)、田漢(1898～1968)が東京で「創造社」(1921～29)を結成し、その後本拠を上海に移して活動を始める。前者「文学研究会」が「人生のための文学」を旗印に写実主義的な作品を数多く発表したのに対し、後者は「芸術のための芸術」をめざすものとされ、前者とは感情的・ギルド的に対立しながら、主にロマン主義的な作品を発表していく。ただし、両者とも外国文学の強い影響の下で創作していたという点は共通しており、両者とも旺盛な創作活動の傍ら世界文学を研究・紹介しながら、中国の旧文学を整理し、新文学を創造することをめざした。

「創造社」は日本の帝国大学や官立の高等師範学校に学ぶ非文学部系の学生結社であり、彼らの文学形成には日本における教養主義的外国語教育の影響がきわめて大きな役割を演じている。例えば、郭沫若は岡山の六高

時代に受けたドイツ語教育や英語教育がきっかけで、期せずして欧米文学と関係を持つようになり、医学から文学へ転向していく。彼はタゴール、ホイットマン、ハイネ、シェリー、ゲーテ、シラー、ドイツ表現主義の作家らに熱狂し、さらにドイツ語訳や英語訳や日本語訳を通して北欧文学、フランス文学、ロシア文学にも親しんでいる。また、郁達夫は始め英訳本でロシア文学を読み耽っていたが、ドイツ語を学ぶに及んでドイツ文学へも関心を広め、そして日本の高校在学中の4年間で読んだ外国文学は全部で1,000部前後に上ると述べている。「創造社」はロマン主義、表現主義等の強い影響の下に活動を開始する。21年8月から郭沫若の詩集『女神』、郁達夫の短編小説集『沈倫』、シュトルム『みずうみ』（郭沫若訳）、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』（郭沫若訳）、ゲールモン『リュクスンパールの一夜』（鄭伯奇訳）が相次いで刊行され、22年には『創造季刊』、23年には『創造週報』、『創造日』が創刊される。彼らの創作や翻訳は五四時期とその退潮期にあった中国文学界に大きな共感をもって受け入れられる。『創造月刊』2巻1期にはトラー『群衆人間』が発表され、2巻3期ではその詳細な作者紹介がなされている。また、彼らによるシュトルム、ハウプトマンの作品紹介ならびに作者略伝は、当時の作家たちにとって世界文学の潮流を知る貴重な情報となった。

「文学研究会」もドイツ・オーストリア文学に冷淡だった初期の体質を反省し、被圧迫民族の文学の一つとしてドイツ文学にも関心の目を向ける。そして『小説月報』第8期には「ドイツ文学研究」の特別欄を組み、『近代ドイツ文学の主潮』、『最も若いドイツの芸術活動』、『大戦とドイツ国民性およびその文化文芸』、『ドイツ表現主義戯曲』等4編の訳文を発表し、ドイツ文学の動向を詳細に紹介している。さらに『小説月報』14巻1期にはカイザー『朝から夜まで』が発表されている。ところで「文学研究会」は被圧迫民族・小民族の言葉に通じている者が少ないという理由で、

翻訳には重訳を厭わなかったが、これは重訳を憎んだ「創造社」とは対照的である。

五四時期にはこの二つの文学結社の他にも「新月社」(1923~33)、「語絲派」(1924~30)をはじめ全国に100余りの文学結社が成立したと言われ、欧米・ロシア・日本の重要な文学作品が数多く翻訳・紹介されている。ドイツとの関わりでは「少年中国学会」(1919~25)の動向が重要である。

「少年中国学会」は、学会が正式に成立する以前の1918年から19年にかけて、積極的に様々な活動を展開している。学会の正式成立以降は、五四運動の精神に鼓舞されるように会員の相当数が西欧その他に留学し、祖国を憂える気持ちから西欧の近代科学や思想に救国救民の方策を探し求める。21年には「中独協定」の附加交換書が調印され、ドイツへの官費留学生の数が増加し、19年から33年までの間に265名が博士号を取得している。それでも五四時期には、西欧の他の国々に比べドイツ留学生の数はまだ比較的少なかった。新興国ドイツに留学した者たちの中には、自然科学、社会科学を研究する者、文学・芸術を研究する者、ジャーナリストとして活動する者等がいたが、その中の王光祈(1892~1936)、宗白華(1897~1986)、鄭壽麟らを始めとする11人が「ドイツ留学生中独文化研究会」を組織し、積極的に中独両国文化の紹介や研究に乗り出す。彼らは中国の學術情報や中国事情を随時ドイツ語でドイツの読者に紹介する一方で、中国の読者に向けてはドイツの文章を数多く翻訳してドイツ文化や思想の紹介に努めている。彼らは組織的、計画的に活動し、雑誌『少年中国』を中心に翻訳や研究を数多く発表した。そこにはショーペンハウアー、アインシュタイン、ニーチェ、ゲーテらの生涯や作品の紹介等が含まれている。中でも、中独文化の橋渡し役としては、「少年中国学会」の指導者の一人だった王光祈の名前を忘れるわけにはいかない。彼は20年にフランクフルトへ渡り36年にボンで亡くなるまでの16年間、始めは政治経済学、後には音楽の研究に

努め、数多くの文章を残している。特に26年以降は中国の伝統音楽を西欧に紹介するとともに、ドイツを中心とした西欧の古典音楽を中国に精力的に紹介している。

この「ドイツ留学生中独文化研究会」の後には「中独学会」が成立し、「中独雑誌」が出版される。そして30年代には21種の叢書が出版されている。その中には、シラー「たくらみと恋」(張富歩訳)、リルケ「若き詩人に贈る十通の手紙」(馮至訳)、「シュトルム小説集」(魏以新訳)、ニーチェ「楽しき知識」(梵澄訳)、「ゲーテ自作ファウストを語る」(梵澄訳、楊丙辰校訂)、カント「優美感覚と崇高感覚」(関琪桐訳)、ゲーテ「親和力」(楊丙辰訳)、「ゲーテ短編小説集」(楊丙辰訳)、レッシング「ラオコオン」(常菴訳)等がある。

ところで、ニーチェの「超人思想」は20世紀始めの中国では、旧文化を破壊し新文化を創造する原理として大いにもてはやされた。1902年に梁啓超が現代ドイツの二大思想として、マルクスの社会主義とニーチェの個人主義に言及して以来、王国維(1877~1927)、魯迅、陳独秀、田漢等、立場こそ違え様々な人物がニーチェの「超人思想」を論じ、その反逆精神を褒め称えている。20年には沈雁氷が「学生雑誌」第7巻1~4号に「ニーチェの学説」を発表し、ニーチェを全面的に紹介し、そのマイナス面も含めて徹底的にしかも的確に分析している。また、20年発行の「民鐸」2巻1号はニーチェの特集を組み、ニーチェ論や翻訳を8編収めている。魯迅は1908年に「文化偏至論」「摩羅詩力説」「破惡声論」でニーチェを取り上げ、17年にはニーチェの大きな影響の下「狂人日記」を発表。18年にはニーチェ「ツァラトゥストラ(緒言)」を翻訳している。郭沫若も23年に「ツァラトゥストラ」翻訳に着手し、訳文を「創造週報」に連載する。そして28年にはそれを「ツァラトゥストラ抄」として一冊にまとめ、出版している。郭はマルクス主義を受容するにつれ、ニーチェ思想との距離を感

じるようになり、その後翻訳を中止するが、この後も他の人物たちによってニーチェの著作は次々と紹介され、中国の作家たちへ大きな影響を与え続けた。

ゲーテも今世紀始めの中国で特に人気の高かった詩人として記憶されねばならない。1907年に魯迅は『人の歴史』の中でゲーテをダーウィンの先駆者であり、偉大な詩人であるとして高く評価している。五四時期には郭沫若が一連のゲーテ作品の翻訳を始める。彼は五四時期をドイツのシュトゥルム・ウント・ドラング期に重ね合わせ、ゲーテから多くを学ぼうと思ったのである。また、郭沫若、宗白華、田漢の3人はゲーテの著作を精力的に研究・紹介し、彼らの議論は書簡集『三葉集』(20)となって結実する。これは当時、中国の「若きウェルテルの悩み」と呼ばれた。さらに「少年中国」、「時事新報・学灯」、「創造季刊」、「小説月報」等がゲーテの詩文を発表し、「時事新報・学灯」はゲーテ没後90年の記念号を出している。郭沫若による翻訳には前述の「ウェルテル」の他に、「ファウスト」(第一部)(28)、「ヘルマンとドロテーア」(42)、「ファウスト」(全訳)(47)、また郭編集の「ファウスト百三十図」(47)等があり、彼の創作にも様々な影を落としている。郭によるもの以外にも20年代から40年代にかけてゲーテ作品の翻訳はかなりの数に上っている。

「少年中国学会」、「創造社」のメンバーはニーチェ、ゲーテの他に、同時代作家ハウプトマンにも注目している。20年以降、陳蝦、希真、沈雁氷らが『東方雑誌』、『小説月報』等でハウプトマンの人となりや作品を詳細に紹介しているほか、郭沫若、趙伯顔、馬伯涵、耿濟之らが相前後して『ソアーナの異端者』(25)、『織工』、『寂しき人々』(29)、『日の出前』等を翻訳して、作者の人となりと著作も詳細に紹介し、批評している。ハウプトマンも中国の新文学に与えた影響は小さくない。

ところで1917年にロシア革命が成功すると、それを受けて20年代以降、

中国にマルクス・レーニン主義文献が次々と紹介される。20年にはマルクス、エンゲルス『共産党宣言』（陳望道訳）が初めて翻訳出版され、30年にはマルクス『資本論』の第1巻第1分冊（陳啓修訳）、38年には『資本論』（全訳）（郭大力、王亜南共訳）が出版されている。郭沫若も25年に河上肇『社会組織と社会革命』の翻訳活動を通して急激にマルクス主義に接近すると、26年に『革命と文学』、『文芸家の覚悟』等を発表し、「革命文学」を提唱するようになる。これによって「創造社」は大きく左傾化の道をたどる。

郭沫若、郁達夫、成仿吾らは広州の国民政府に参加し、26年から27年にかけて郭沫若は国民革命総政治秘書長として蒋介石（1887～1975）率いる北伐に従軍する。しかし、27年4月12日に蒋介石が反共に転じ武力クーデタを起こすと、作家たちは弾圧を逃れて租界上海に集まり、ここが文学の一大中心となる。

20年代以降は様々なやり方で中国にマルクス主義が受容され、いわゆる「革命文学論争」で激しく争った魯迅、「創造社」、「太陽社」を中心とする文学者の間で統一の機運が高まり、30年に「中国左翼作家連盟（左連）」が結成される。そして国民党地区における厳しい言論弾圧の下、作品の深化と多様化が進んでいく。郭沫若は租界上海からさらに日本へ逃れ、28年から約10年間の亡命生活に入る。郭は亡命期に歴史や文字の研究ならびに創作・翻訳活動に没頭し、31年にマルクス『政治経済学批判』、36年にマルクス『芸術作品の真実性』、38年にマルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』を翻訳出版している。

ドイツ表現主義の影響は郁達夫等「創造社」の作品にも萌芽が見られるが、30年代に日本の新感覚派の影響の下に上海で新感覚派と呼ばれるモダニズム文学が成立する。彼らはフロイトに学び、性心理の解剖を試み、意識の流れの手法を用いた。30年代には特にシュニッツラーが数多く翻訳さ

れていることが注目される。また、これとはやや系統を異にするが、30年代にはレマルクやエーミール・ルートヴィヒの作品も数多く翻訳されている。

### 3. 日中戦争、国共内戦から中華人民共和国成立へ

1937年に日中戦争が始まると郭はすぐさま中国へ戻り、抗日戦線に身を投じる。第二次国共合作の成立によって軍に政治部が創設され、郭は宣伝担当の仕事に就く。抗日戦初期には文学は一般に思想宣伝・煽動へと傾き、ルポルタージュがさかんに発表された。やがて38年に武漢が陥落し首都が重慶に移ると、国民党地区での言論統制が強まり、現実をそのまま描くことがむずかしくなった。こういう状況の下、郭はゲーテ『ファウスト』にならない歴史に題材を求めて『屈原』(42)を始めとする一連の史劇を書き、国民党の独裁に対する批判を行った。

解放区における知識人の弾圧と言論統制も熾烈を極めた。42年に毛沢東(1893~1976)が延安で文芸座談会を召集し、文学・芸術は党中央の政策を民衆に伝える宣伝メディアであると規定した(「文芸講話」)。これが49年の中華人民共和国成立後も長く共産党の基本方針とされ、これに批判を加える知識人・文学者は大量に粛清された。

五四運動以降は、欧米の古典や現代文学の名著だけでなく新興のソ連文学やアジアの作家作品も数多く翻訳出版されているが、内戦が頻発し、日本が帝国主義的侵略を始めるなどして、中国が民族存亡の危機に陥ると、新文化運動も挫折し、ここに到り外国文学の移入も中断してしまう。

以上、近・現代中国におけるドイツ文学受容の様子を概観してきた。総じて、ドイツ文学・思想の翻訳は、その他の外国文学等の翻訳に比べて数は決して多くないが、ゲーテ、シラー、ハイネ、ニーチェ、ハウプトマン

ら、ドイツの古典主義、ロマン主義、表現主義に現れた強烈な主観性や自我意識、そして社会に対する圧倒的な反抗精神は、様々な流派の違いを越えて知識人の思想形成や中国の近・現代文学の創出に計り知れない影響を与えてきたのである。

#### 参 考 文 献

本稿執筆にあたっては作家の著作ならびに作家・作品の個別研究をはじめ数多くの文献を参照したが、以下に概論的なものだけを掲げておく。

梁啓超『清代學術概論』（1921年）小野和子訳注（平凡社 1974年）

前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会 1975年）

巖安生『日本留学精神史』（岩波書店 1991年）

張威廉主編『徳語文学詞典』（上海・上海辞書出版社 1991年）

中華人民共和国文化部对外文化聯絡局編『中国对外文化交流概覽(1949-1991)』（北京・光明日報出版社 1993年）

馮錫璋『中国現代文学比較研究』（上海・上海社会科学院出版社 1995年）

王錦厚『五四新文学与外国文学(第2版)』（成都・四川大学出版社 1996年）

藤井省三、大木康『新しい中国文学史』（ミネルヴァ書房 1997年）

